

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	格の研究 〈修士論文及び卒論要旨〉
Author(s)	西村, 和子
Citation	広大言語 , 6 : 86 - 86
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046260
Right	
Relation	



格 の 研 究

西 村 和 子

「格とは何か？」これを副題として、少しでも格の本質に近づきたいと思いました。

先ず、語形式を基準として一般に認められている格を、その意味・種類・用法について調べることによって、格の概観をつかむ。次に現代英語における格をどのように考えるべきか、また古代英語と比較することによって格語尾と機能（意味）の関係がいかなるものであるか、古代英語から現代英語への格の変遷の原因・意味は何であるかを究明する。

格は名詞的語類が文に働く場合、いろいろな関係にたつが、それを表示する言語事実に対して設定せられた文法範疇である。格関係は、英語に限らず、語形式のみで表示されるのではない。格語尾を有した古代英語時代にもすでに格語尾がその機能を果たすことが不完全な場合が多く、同一の語尾が種々の格をあらわし、同一の格が種々の語尾であらわされていたという事実、つまり、格ばかりでなく、語形式と意味機能の関係が複雑曖昧になると言語使用者は、語形式以外の何らかの手段を考えだし、文法上の区別を表わそうとする。英語の場合、英語に内在する表現力が發揮され言語的表現を判然たらしめ、一定せんとする努力に名詞語尾に代る諸手段の出現の原因が存する。従って、格の語形式の消失は格関係の消失を意味するのではない。そしてその格関係はより表現力の豊かな手段で表わされ今日の言語生活に表われている。

< 参 考 書 >

E. A. Sonnenschein: The Soul of Grammar

H. Bradley: The Making of English

泉 井 久之助 : 言語構造論

高 津 春 繁 : 印欧比較文法 (岩波全書)

: 比較言語学 (岩波全書)

中 島 文 雄 : 文法の原理 (研究社)

宮 部 菊 男 : 格と人称 (英文法シリーズ)

ホ ル ソン : 英語の形態と機能 (山本忠雄訳: 英語学ライブラリー)

バゼル 他 : 形態か機能か (佐藤一夫訳: 英語学ライブラリー)

そ の 他 (文責 本人)